

安野フィールドワーク報告

多賀 俊介

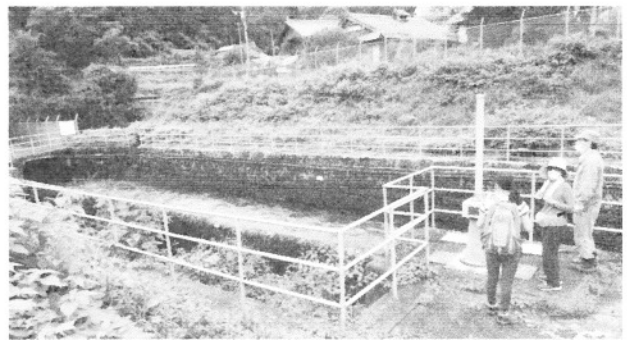
今年8月末、川原洋子さんの案内で安野フィールドワークを行うことができた。広島に加害の歴史を学びたいとの相談を受けてきた若い世代（社会人）からの要望を伝えたとろ快く引き受けてくださり、普段見学できない場所にも案内して頂いて大変有意義であった。その概要を報告する。8時半、市内中広をレンタカーで出発。若い世代3人と川原さん、多賀の5人である。まず、安野発電所で概要説明後、坪野貯水槽まで上がり川原さんと中国電力の方の説明後、「安野中国人受難之碑」に向かう。川原さんが、持参資料の、碑に刻まれた名前にふれる遺族たちの写真等を見せて「碑のはたす役割は大きいと感じた」と話された。中国人被爆者の碑の建立に仲間と取り掛かっている私にとって特に印象的であった。

津浪収容所跡、香草収容所跡での説明の後、香草工事現場跡に進んだ。川原さんが「ここは宋継堯さんがトロッコでの運搬作業中事故に遭った場所です。」と現場でトロッコの軌道跡を示した後、持参していた菓子箱のようなものを開けられた。中にはトロッコの模型が入っていて驚いた。出発の時から「なぜ菓子箱？を持参」と思っていたからである。トロッコ模型を取り出して、「これは裁判の時の証言補強資料として協力者に写真を見てもらって作ってもらったものなんですよ。」と言いながら「トロッコがこう転がって、宋さんが・・・」



と身振り手振りでも説明された。その現場でのお話はこれまでもお聞きしたことはあるが、トロッコ模型を使いながらの今回の説明は、さらに印象深く、裁判勝利に掛けられたた強い思いも少しかもしれないと感じることができた。

「今回は、中国電力の方をお願いして今まで行けてなかった所もいきますよ。」とお話で向かったのは丁川の導水トンネルが地上に姿をあらわしている場所で、初めてその様子を見ることができた。



硬い岩盤を掘って高さ・幅が3～3.5mの導水管を全体約8kmにわたって設置する工事、もし自分が強制的に従事させられていたら飢えと寒さの中でどんな思いだったであろうと勢いよく流れる水を見ながら考えた。土居取水口では中国電力の方が普段は使っていない川に浮かんだゴミ、木等を掬い取る装置を稼働して見せてくださった。以前は人力だったというからこれも大変な作業であったろう。

帰りに津浪「道の駅」で遅い昼食を取った。ここでアユの塩焼きとか焼いておられる町議会議員さんと川原さんが親しく話をされているのを見て、地元の方や中国電力とも良い関係を作りながら長い闘争を続けてこられたのだなと改めて感じた。そしてこういった取り組みを若い世代に伝える機会が持てたことを感謝し、こういう機会をさらに作るのが私の義務と決意した。

小島 亜佳莉

金井 良樹

安野発電所への中国人強制連行についてこれまで人から話を聞いたりしていましたが、今回初めて実際に現地を訪れることができました。当時掘られたトンネルの場所や発電所のしくみ、現在も当時のまま残っている場所など、自分で調べて現地を訪れただけでは分からなかったことをたくさん教えていただきました。また何よりも被害者の方々と実際に接しながら証言を聞いてこられた川原さんからまさにその場所でお話を聞くことで、そこに働き苦しんでいた人々のことを前よりリアルに感じることができました。

しかし一方で、食べるものや着るものもままならない劣悪な環境や日本軍による差別や暴力のほか、あの山のなかに8キロのトンネルを掘るなどの過酷な労働がどれほどのものだったかというのは、自分自身まだまだ想像してもし尽くせていないだろうと思います。多くの朝鮮人を連行しても労働力が足りなくなった建設会社が中国人の「移入」を何度も政府に要請し実現したというお話を聞き、「国策」としての上からの暴力だけではなく、むしろそういった市民の植民地主義の意識が侵略戦争を支えたのだなということを改めて感じました。日本の植民地主義・加害の歴史は、国としての責任はもちろんですが、中国や朝鮮などアジアの人々への差別意識の問題など未だ続いている問題として、自分にできることに取り組んでいきたいと思っています。

実際に中国人たちが収容されていたり、働かされたり、事故に遭った現場でお話を聞いていると、より一層それぞれの証言が大変重く感じられ、当時のうめき声が聞こえてくるようでした。

劣悪な労働環境の中、重い石を運び出しながら山の中でトンネルを掘り進めた距離の途方もなさや絶望感は、車で移動しながらではとても理解できるものではないですが、現地でしか感じられないこと、学びが多くありました。

そして、これほどの苦痛を強いておきながら、つい最近まで何の謝罪も救済もされなかったことは、戦後も継続した日本の植民地主義、戦後処理のまずさを象徴していると改めて感じました。

また、被害者の声に耳を傾け共闘した人々の営み、そしてその結晶としての「安野 中国人受難之碑」を目の前にすると、広島で語られる「平和」が、ほとんど「日本人」の「被害」にしか光を当てないことに対する抵抗の証のようにも思えました。

このような地道な取り組みへの敬意を表しつつ、私たちが継承・発展させていかなければという思いを新たにしました。

暑い中、案内をしていただき本当にありがとうございました。

